

3月31日 庫裏玄関前の植え込みを整備

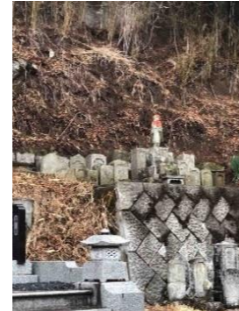
玄関前の斜面は、手入れもできず植木が伸びきって見るに堪えない状態でしたので全て伐採しました。そこに裏山のもみじを移植し周りには彼岸花の球根を植えました。天目区の檀家様にご助力いただいたので、これだけ大掛かりな作業にもかかわらず半日で終わることができました。

私が留守の間に植木の刈込をしてくれる檀家様や墓地の草刈り、傷んだ箇所をの修繕など、皆様の身施のおかげでお寺が維持できております。



4月3日 無縁墓地の移設と整備

しだれ桜の下にありました無縁墓をお地蔵様と一緒に墓地最奥の高台に移動しきれいに並べなおしました。移動後に広く空いた桜樹下には、お盆までに萬霊塔（永代供養墓）を新設します。旧来型の墓石を希望されない方や墓じまいを検討中の方、また来世は天目山の桜樹下で永眠されたいという樹木葬を希望される方に対応できるよう整備を進めてまいります。



景德院様とのコラボ御朱印 第二弾

昨秋11月に期間限定で授与した御朱印を桜に合わせて今春も行いました。4月13日(土)しだれ桜が満開の時期にスタートし、5月12日(日)まで行います。期間中には勝頼公まつりもあり、おかげさまで多くの方にご参拝をいただきました。



俳句で入賞

昨年末から始めた俳句ですが、年初の句会では39句の中で奇跡の2位を獲得しました。
『寒庭の陽だまり丸く猫と石』
門前の檀家さんの猫がよくお寺に来るのですが、寒い日に猫は庭の暖かい陽だまりを知っていて日向ぼっこをしています。丸石と並んだ猫の、ほのぼのした情景を詠みました。しかしビギナーズラック、その後は箸にも棒にも掛かりません。引き続き磨いていく所存。

◎定例坐禅会のお知らせ ☆初心者大歓迎

★毎月最終日曜日 午前6時45分～8時30分 ★志納金300円

読経15分・本堂坐禅30分・霊石泉岩坐禅30分・茶礼30分の内容で行います。

<発行者> 臨済宗建長寺派 天目山栖雲寺 (宗教法人棲雲寺) 住職 青柳真元
<所在地> 〒409-1201 山梨県甲州市大和町木賊122 TEL0553-48-2797
<ホームページ> <http://www.tenmokusan.or.jp> または[栖雲寺]で検索



公式ホームページ



Instagram

お寺の説明、行事案内など

天目山の写真 Please follow

せいうんじ
栖雲寺たより

天目

第46号

発行日
令和6年5月1日



普応国師中峰明本大和尚700年遠諱

栖雲寺開山業海本浄和尚の師僧である中峰明本和尚の700回忌を厳修します。正当は令和4年8月14日でしたが、新型コロナウイルスの蔓延や準備の都合で開催できずにおりました。2年遅れとはなりましたが、11月9日に鎌倉の大本山建長寺から吉田正道管長猊下、甲斐恵林寺から古川周賢老師をお迎えし、延在の700年遠諱として国師を称えたいと存じます。

700年遠諱に向けた報恩行事

- 5月26日(日) 壹日坐禅会 ※
- 6月2日(日) 天目山茶会
- 7月27日、28日(土日) 式日間坐禅会 ※
- 10月26日、27日(土日) 式日間坐禅会 ※
- 11月9日、10日(土日) 宝物風入れ展

11月9日(土) 700年遠諱法要

※坐禅会の詳細はホームページでご確認ください

中峰明本座像(国指定重文)



栖雲寺蔵

天目山茶会



会期 令和6年6月2日(日)
9時～15時

会場 天目山栖雲寺境内
薄茶席 丸山恵子社中
薄茶席 たろう庵社中

御香料 1500円

今後の境内整備計画

- しだれ桜の樹下に萬霊塔(永代供養墓)を建立し、近くに樹木葬の区画を併設します。
- 東屋は基礎から傾き柱の一部が腐っているので部分的に補修をし、参拝者にもっと有効に使ってもらえるよう本堂前に移築します。
- 鐘楼は屋根が傷み4本の柱も歪んでいるので、解体して屋根を新調し組み直します。銅板葺きを予定しておりましたが、日本製鉄にお勤めの檀家様のご尽力もあり、チタンで葺くことになりました。チタンは高価ですが軽量で強度もあり、耐用年数は半永久的と云われております。

中峰明本はどんな人？ ①（全2回） 『出家と天目山での修行』

栖雲寺開山業海本浄の師僧である中峰明本和尚様の700回忌になります。今回から2号にわたってその人物像を書き記したいと思います。まず今号は中峰明本の略歴についてご紹介いたします。

中峰明本は中国が元の時代(日本が鎌倉末～室町初期)に元の天目山を拠点として厳しい禅を修めた臨済宗の僧侶です。皇帝の帰依を受け、日本からも多くの留学僧が海を渡り弟子入りした程の高僧で、業海本浄も直弟子の一人です。中峰自身は来日しておりませんので、栄西禅師や建長寺開山の蘭溪道隆、一休宗純(一休さん)、沢庵宗彭(たくあん漬けの和尚)、白隠禅師などに比べると多くの方がその存在をご存じないのではないかと思います。しかし日本の臨済宗史を語るうえで欠かすことのできない最重要人物の一人であります。

中峰明本は南宋の都であった浙江省臨安の近くで生まれました。9歳の時に母親を亡くし、その後の数年間は宋の滅亡と元が統一する戦乱の中で育ちました。15歳と若くして出家を決意したのは、父に育てられながら悲惨な戦禍を目の当たりにしたことや母親への供養の気持ちが要因でありましょう。このときは父親の反対などもあって出家は断念しましたが諦めたわけではなく、自ら腕の上で香を焚いて仏に供養し、昼は読経、夜は念仏行道、霊洞山の山頂で坐禅をするなど、禅修行への決意は並大抵のものではありませんでした。浙江省臨安には、中国南東諸省にある諸山の中で最も高く寒いとされる天目山という山がありますが、中峰が25歳の時、反対する父親を諭したのかそれとも家を飛び出したのか、ついに天目山の高峰原妙に弟子入りします。この時、決意を示すために燃指(ねんし=自分の指を御香で燃やし尽くすこと)をしておりその覚悟がわかります。栖雲寺所蔵の中峰明本像にも燃指で焼失した小指が彫り込まれています。



中峰明本像の御手を上から撮影した写真

8年間修行し1295年33歳の時に師の高峰原妙が遷化すると、大覚寺住職への推挙や弟子の引き留めも聞かず天目山を去ってしまい「幻人」として山林江湖を移り歩きました。天目山を離れて5年後の1300年、太湖の東にある蘇州平江路では「棲雲」と名付けた小庵を構え坐禅をしていました。栖雲寺は開山当時から棲雲寺とも記され併用されてきましたが、棲雲寺の名は業海がこの小庵から貰い受けたことは容易に想像がつかます。この「棲雲」道場には中峰を慕う500人もの修行僧が集まってしまい収容しきれなくなり、精舎が別に建てられたと記録に残されています。

中峰の禅風はすさまじく、隠遁生活に徹したものであったため、皇帝などの権力を嫌い五山など官寺の住職を拒み「この身の閑けさはいくら金を積んでも買えはしない。」と権力者からの拝請は全て拒絶しました。定居することなく、時には舟居し時には各地に「幻住庵」と名付けた草庵を作っては身を隠して修行を続けた、まさに禅僧の中の禅僧です。そしてまた自らをも「幻住」と号する様になりました。

どれだけラブコールを送ってもなびかない中峰でしたが皇帝もあきらめません。五山への拝請を続け、また禅師号を授与したり金蘭袈裟を寄付したり、あの手この手で帰依を形にしていきます。しかしそれでも中峰は都に来てくれない、五山寺院の住職にもなってくれないのです。皇帝としてもおそらく最後の手段でしょう。来てくれないのならば中峰のいる場所を大寺院にするしかない。と中峰が望んだわけでもないのに、天目山の獅子院という師の高峰原妙時代から続く小院に庫裏・僧堂・法堂・方丈・仏殿などの伽藍を整備して獅子正住禅寺という巨大寺院を建設してしまいます。中峰は住職となったものの、それでもなお幻住庵を居住の場として使っていたという徹底ぶりです。晩年まで精進を怠らず、弟子を思い指導を続け、1323年8月14日に61歳で示寂。弟子の数は1700人を超えていたと伝わっています。それほどのカリスマ的な臨済宗の僧侶が中峰明本です。

次号では、中峰の禅風とその禅が日本に伝わり臨済宗の一大勢力に発展した歴史を紹介します。

【令和6年 1月～4月の報告】

元旦の能登半島地震 被災者支援

被災された皆様には心中よりお見舞い申し上げます。栖雲寺でできることはわずかですが、馬頭観音様の賽銭箱に1年間で御喜捨いただいたお賽銭の全額を建長寺観音募金に寄付いたしました。そしてその建長寺観音募金からは、石川県に義援金300万円、復興支援団体の活動資金約200万円を拠出しました。



私はあきる野市雨間地区を托鉢

1月24日にはあきる野・羽村・青梅など西東京地区を和尚20名で托鉢し約120万円の喜捨を得ました。2月13日には鎌倉で建長寺と円覚寺の合同托鉢を実施し約70万円の喜捨を得ました。また、被災地で避難生活を送る被災者に500人分のけんちん汁をふるまう計画では、私は現地に行くことができませんでしたが事前の準備には協力させてもらい、丸1日野菜をきざんで現地へ思いを届けました。今後も可能な限りの支援を続けてまいります。

3月1日 徒弟の弘敬 制間暫暇で帰山

徒弟が京都の修行道場から春の暫暇を頂戴し栖雲寺に戻ってまいりまして、この半年のお互いの出来事などを語り合いました。ご指導いただいている老師様には感謝してもし尽せないほどの恩を感じております。これでようやく2年が過ぎましたが、もうしばらくお世話になる予定です。檀家様からも励ましの言葉を頂戴しありがとうございます。

3月4日 甲州市五寺院で結成「武田の環」

塩山の信玄公菩提寺の恵林寺、源平合戦で功を立てた甲斐源氏が戦勝記念に建立した放光寺、甲州ぶどう発祥の地である勝沼の国宝大善寺、勝頼公廟所の景德院。甲州市を代表する四大寺院に栖雲寺も加えてもらい、さらに市内にある企業の代表なども参加され、研修会および食事会が開催されました。恵林寺住職が景德院住職から山門下で説明を受け、大善寺では住職から宝物の説明を受け、まさに歴史が繋がる夢のような時間。栖雲寺は私のご案内しました。今後の地域活性化には欠かせない五寺院連携の可能性など意見交換をしました。



景德院の山門下で

3月彼岸 歴代住職の墓地を整備

斜面の土中から一部だけが見えた状態で長年放置されていた歴代住職の卵塔(らんとう=僧侶の墓塔)を掘り出したところ、次から次へと石が見つかり、手の届く範囲で全ての石を掘り出してきれいに並べました。暫暇中で栖雲寺に戻っていた徒弟の弘敬禅士と私もほんの少しの手伝いはしましたが、そのほとんどの作業を総代の佐藤学さんが行ってくれました。卵塔を掘り出した後に大きな穴となってしまった斜面は、玄人の技術で上手に石を積み上げきれいに整えてくださいました。いつかは私もこの墓地に永眠するので、ここまできれいにしてもらい安心です。

